



門へ13 特
號 1833
卷 58

繪本古図記五篇卷之十

目録

湯加反法カキマシ心受院ココロウケノ羅羅旗ララノ法ホウ

日圓ニッポン法ホウ華カ舞マシ舞マシの障幕シヨウマクを法ホウ日圓ニッポン

聚樂クワイガク新シン幸コウ之ノ法ホウ

日圓ニッポン

泚シ於オ管カン弦ケン乃ノ圖ト

舞樂マシガク乃ノ圖ト

水ミヅ瓶ビン大ダイ茶チャ會カイ之ノ法ホウ

日圓ニッポン二ニ系ケイ

繪本古図記五篇卷之十



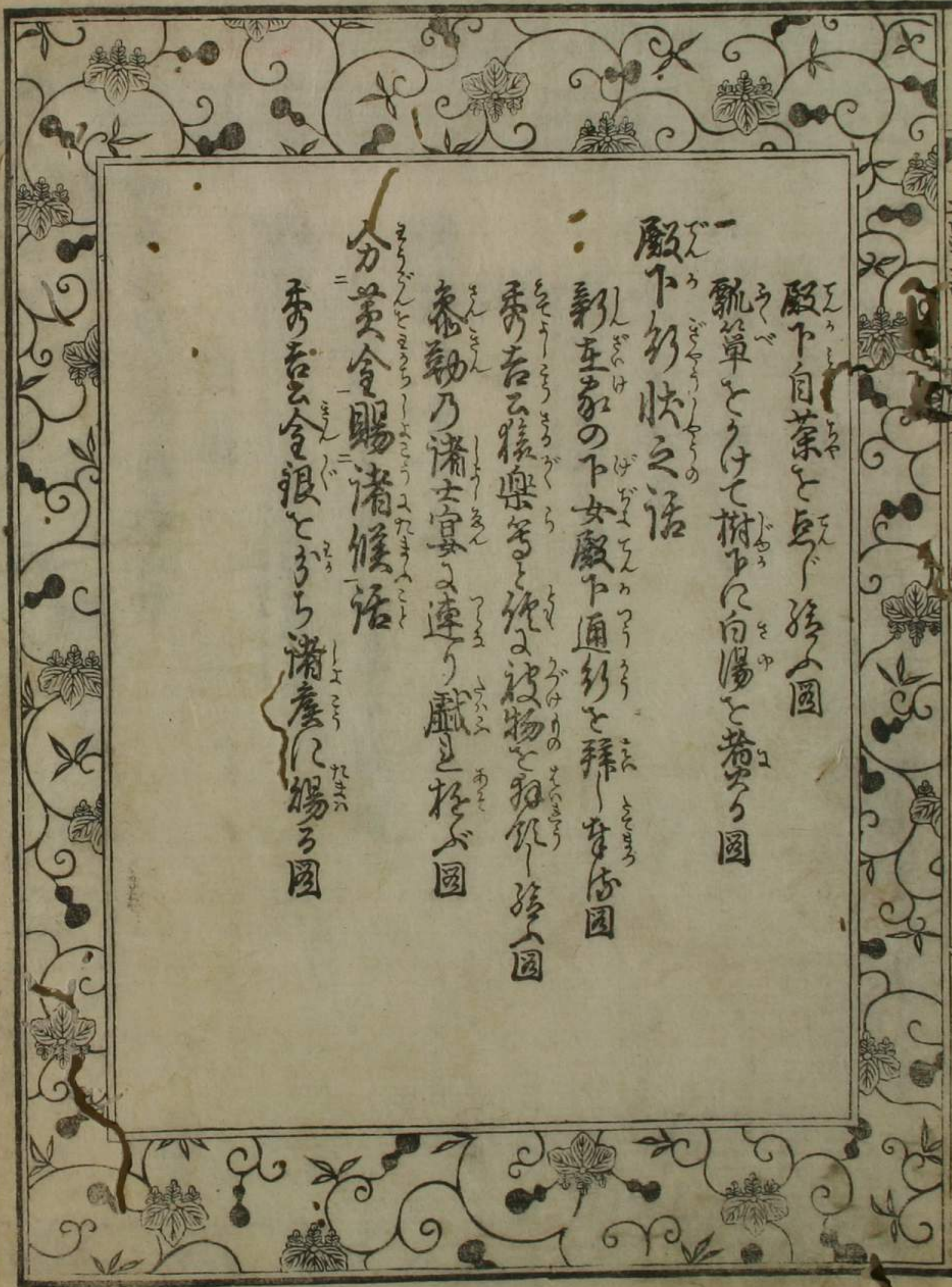
繪本古俗記女篇卷之十

賜加茂清心曼陀羅旗

加茂の計以佛本坂乃合我本山山陣心を斬て其威風西海の諸島に
 近郷の國人多々加茂が威風を思ふ心を西郷に持て一人志破の
 機を解く者良しされども機兵屋に方々をかく朝びけ文書の回を
 考へお出く我々後より采るたり月夜に世に二統を臣
 乃威風を靡吹着り定運者減る目のつくりれ形勢をいれ始終勝
 利のべき籠城に非とて志摩國義廣を斬り殿中の御前を
 兵結ひ終る令汁と助けらる城を圍ひて薩摩國に引退くは
 妙い一統中宇去の西郷(國人皆登城)て始めて國中平定する
 け耐肥後國の(西郷)九國西國の國々加茂が勇名はじりて

殿下自茶と巨く孫の國
 孰算とくけて樹下に白湯と着る國
 殿下の状之話

親王家の下女殿下通好と拜しなす國
 秀吉云猿樂者と依り被物と相ひ孫の國
 糸勒乃諸士宴を連り獻と給ふ國
 分美令賜諸候話
 秀吉を令報とから清彦に賜る國





無妙法蓮華經
 天照皇大神宮
 春日大明神
 大菩薩

此經之靈驗不可思議...
 凡有患難者...
 讀此經者...
 無不獲救...
 誠為濟世之良藥也...
 凡我佛子...
 宜常誦念...
 庶幾永無災厄...
 而享長生之福...
 矣



加茂法...
 曼陀羅の旗
 法華經の
 陣幕と
 錫の國

此の旗は...
 法華經の...
 曼陀羅の...
 陣幕と...
 錫の國...

曼陀羅の旗

恐れぬとすのほしまゝの智り小西松澤守約長の今度の合戦は
 家臣守地文を討せしむる志は林守と眼石にあらざる攻
 海軍の能く殿中の御威光志摩國の扱ひよく勝て燃を清
 我功とていしむるを皆加るが武勇と鬼神のよく養ふや
 小西が不能を激する是にゆるし清の忠の小西が勇のよく後
 思のよく忠の居るは後年朝鮮征伐の時約長は援軍を
 彼地はねいりし約長も此合戦は勝利を得威勢はよくこれに
 余の小西を討つたは道に成るを猶も小西功もよく小西約長も
 又万石の加増のふくむる清人をもよく養ふ加後清の志を
 西の果報のよくき着るが後殿は備ひ滴の効かりて我を勝
 名に勝つて武造のふくむるはよく出るをほしむるは清の
 けのよく政のよく通つては計ひのよく法華寺再建の料を
 宗乃信心着るがよく肥後の代とよく法華寺再建の料を
 して三万石の賜り受けたる我功援軍とて御威光希ふは
 旗法華寺の陣幕と揚ひたる清の志摩國の信着りてあらは
 二教の護り書を附し是の心を慰めしむるはよく止まらる

聚樂抄

去る天正十一年の春三月に東宮殿下秀吉公洛陽の西聚樂乃地は城を
 築せ給ふ世の人足と跡にて聚樂城といふ其構に方三の歩ありて石
 の築垣より築と樓門竝に建てて是は清の御威の威光の白
 根乃深の早の光にまがひ棟の瓦は玉虎風は嘯合龍雲に吟るの顔と
 彫百工心を確き丹まらんとて其華嚴なるの詞をなして清のよく

乃の幸之國

真顯記玉篇卷十



五

五

五

聖年又年乃秋功令修九月十八日大坂より發樂城移り
乃爾乃爾令銀と積り私教百艘渡り居る(まはる車入百輛食む
多人員と引張樂とる事上方云家門臨諸侯主事迎のゑそは
多羽邊よ出く待まら實に秀吉を以威勢發するの事
秀吉正工ふん奉りて發樂の亭より移りて居る
慶し終に徳吉院を以て奉りて居る新に宮む儲の所を悉く
檢は舊の所灣の向に沖興をせあり座より弄臺花石の樂座後宮
局よりつとる若翁を遷し移りて居る且移幸の例に往者永享九年
室町殿(沖幸也)に居りて居る(西記)に云く今せらるる遠近の國々
よりは移幸の事と兼日より京都に登り集りて物々華富體
なるといふ事也)に月十日秀吉正工を以て沖幸を催し居る也

らるる(一)戸上(後)南殿又出沖ありまは移りて居る也(一)他所發樂の亭より
移幸はまは威勢に足り沖門より出く(一)西の方聚
樂に居る路治九十八町藝園(一)藝者の武士六十に人其移列を圍む
准后女御の趣を先み進み典侍沖局を當るといふ樂車又十餘あり
其次に塗輿二の宮乃沖方右佐九中務御那康親王准三宮九
條兼右云准三宮一條内基云後一位二條昭実云菊亭右大臣晴季
云徳太子(一)前(一)右云准三宮云准三宮云准三宮云准三宮云
遠御勅修寺大納言晴を御大炊沖門前大納言經教御中山大納
言親徳御白川三位雅朝より方より次は右の若孫教十人次に
近衛の次は右右六人次に貫吉二人次は右近衛大納言司大納言
信房御右近衛大納言西園寺大納言實益御次は冷人に十五人安

御遊きよゆりの管弦くわんげんの圖ず

貞觀御遊圖卷之十



貞觀御遊圖卷之十

樂成とて樂と奏に次は鳳輦次は近衛大后信實云小田内大后
 信雄云鳥丸大納言光宣御日野大納言輝實御之我大納言敦道
 御大和太納言秀長御近江中納言次御依家宰相秀家御其次
 関白右政大臣後一位豊臣秀吉公乃沖車次は近江の騎馬二列
 列ぬたに増田右衛門尉長盛をにじり三十余人右に石田治部少輔三成
 をにじり三十余人次に雜式二十人次に陸身六人次に布衣三人次に
 摩惠多宰相奉家御小田侍後信包御令吾侍後秀秋御其外
 諸國の大名教を以て供奉せらるるもの一皆馬よりして裝束は唐
 織は織蜀の錦兵部の後都て美と以て花と稱し遠近の男女
 美袖振姿を構へ仮衣をおて集り凡るの市乃に風輦既聚
 樂は然しに石大后膝裏に御輿の簾を卷き給ふ帝御輿とあり

させ給ふ万里小路次希光房御裾を卷て殿内に入御し給ふ秀吉
 云穉くなり着座の儀式酒七献其外三献の御天香を下し給ふ身
 七献の御香を云沖氣をなる山海の味種く乃着菓其教と知
 らんおしと座の面はしほそらぬ御多御言一喜御はきて後其
 志はしほしとる隈くにほ揺らり給うて若草はまどや池水小細波
 あせて岸をいり一息も乃面白く戯しと己心乃候なり小天
 歌持みほけは押しまし給ふ今日の日も短きとや身はくまて
 十六夜の雲間波はく月い青朧の山乃梢よりとほとくはゆらに
 一かゝるぞこよのふゆでしとそけ良夜といややとや給ふの屋
 の武帝乃甘泉殿のま乃給ひ唐の明皇の羅山宮の月の夜など
 名い出られ給て沖橋の管絃と惜るるべきとて又常樂郢曲を平

樂々と奏へて夜間して秀吉を退出せし次日十日秀吉去る條
章と出り着亭殿勅修寺殿中山殿示さる其後地子積又
み又百二十兩と禁中乃料とほ地子奉八百石の内三百石を名く仙
洞の然し又百石以上の宮殿の料とほ及る侍郎八石を名て諸門
迄諸公家の料とせらるべしと叔敏との次子八張即之が父字足孫
舜拳の画三幅沈香百竹とまよと捧げらる猶子昂の画二幅鼻比
一枚堆紅の画一竹小袖三龍表右カ一腰と伏見の宮邦房親王に
其外の事上方各衣服二重右カ一振を進せらる天壽孫うるはしく
事上方中壽の沖酒宴とじり又沖去羨度くあり方歳と唱る
夢く春やとく鶴と朝を告る以殿下と座とませられ若く疾
の押入にせ給ふおまる十六日雲打志ありる屋に雲とよりと流く

なる中此のしが皆ありて小雨より出ぬるにそと乃沖還御中止め
られ和参の沖會と催されたる

誦寄松親和歌

関白秀吉

万代乃君が御幸にささかりん編きたる杉のゆめ

六宮小依丸

繁るおれや若きもはらなる御は風を代をささる庭の松がえ

邦房親王

世にまほしき御のまほし松風の梢よりよりうりよの夢

九条兼孝

浪風と吹きぬまよりて松のさやまて松根のほ方のうら

一条内基

舞臺
之
圖



真頭巴五宮用卷下

十



真頭巴五宮用卷下

九

お生の松の縁もくまうにいくみ代種べきまは見えん

二条昭実

日みそくまきなれ松がえのうふまをせのらに榮えん

近侍左大臣

君も心あはせしめてふ子代のをまをの松を

菊亭右大臣

秋は例の外まをなつ國は風松より印てまよりつじ

用大臣信雄

龜のとりとさるるを廣き池の端根乃松は本原き

大納言季の長

おはてくみ御奉と松の着浪のあうらけき花乃つら哉

中納言季の次

おまはしる御代とて松風は民乃まを系のおまびくかり

け外事とま下武お及び仙洞女院令婦の御あ悉くあまのた

物さきぐあよと略の御十七日舞樂あまの番よまの御樂あ

二番延去樂あ二番右平樂あ二番御御あ二番御御あ

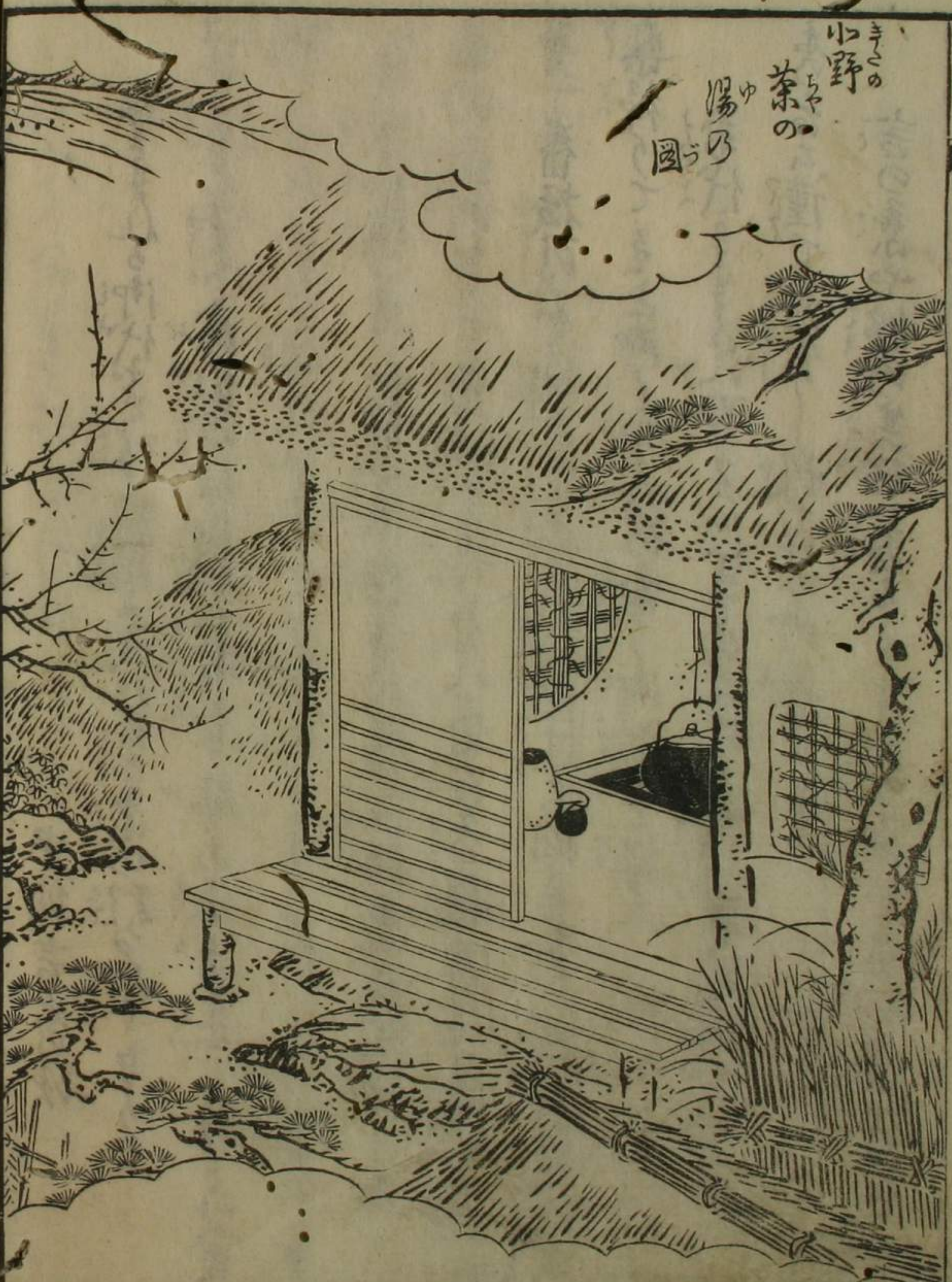
番納藉利あ七番採索老あ八番右右の藉あ九番遠城樂

あ十番撥あて終り樂ああにけ大納言とてはあああ

樂あてると御あああああ御製と賜あ

あ代ああああああああああああああああああ

あああああああああああああああああああああ



小野の茶の湯の園

真蹟記五卷

其二



真蹟
請
五
篇
卷
十

漢く羅縷をより纏ひ綿繒のよに外に出りられはうほしきも是へ
 比只まびるこそよの樂きとと下押さるる院ついでのものを
 ありき多し利休元末徳明の者なりし末に殿より修り来る古流を
 後院ついでに面しに等すのせまき圍は自在と稱する古谷の冷き
 茶碗の態と打きて用ひ其外後深の鉢ついでも蕨縄ついでのよう
 く結ひしなり院ついでも葉繩ついでを交へて結り竹の籬の上の掃りぬき
 短きまはアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
 む彼面美の飽満ついでと福蓮ついでを押ししるき風流ついでと聚樂乃下
 悉く利休居士が分るしあり茶碗ついでのよの優よよとまのぶ下
 ともるしは系伏ついでの所人も修り修り得ついで古流と捨世間ついでの院
 利休が風流ついでも修り修り院ついでを賢教ついで者ついでと跡ついでに茶碗ついでの心を考ついでる
 者都會の地ついでもはし殿下もついでとついで流の移らせ給ひ或
 利休が室ついでは後院ついでありての院ついでを喫ついでひひついでの自茶ついでと息
 ト在系の諸侯ついでの揚り今あり利休ついでを院ついで茶碗ついでのよの流ついでたよ
 是はひひと諸國ついでのよの久郡ついでを村長ついでのよの院ついでを知りてい殿下ついでの所
 茶首尾ついであり且世間のほしきもは院ついでも我もついでと利休がついでひ
 之はひひと利休がついで留るるの甚しき又け時代ついでの一考ついでのよの院ついで
 附は天正十六年十月朔日華洛出野乃松原に好ひくま修都鄙
 折りて大茶ついでの會ついではとと去る八月と向より系大ついで休ついで全ついで良
 大坂ついでの院ついでを立ついでて教ついで考ついで乃茶人ついでを立ついでる其高ついでれ乃文ついで
 曰く

十月朔日小野松原に好ひく茶湯真彩也

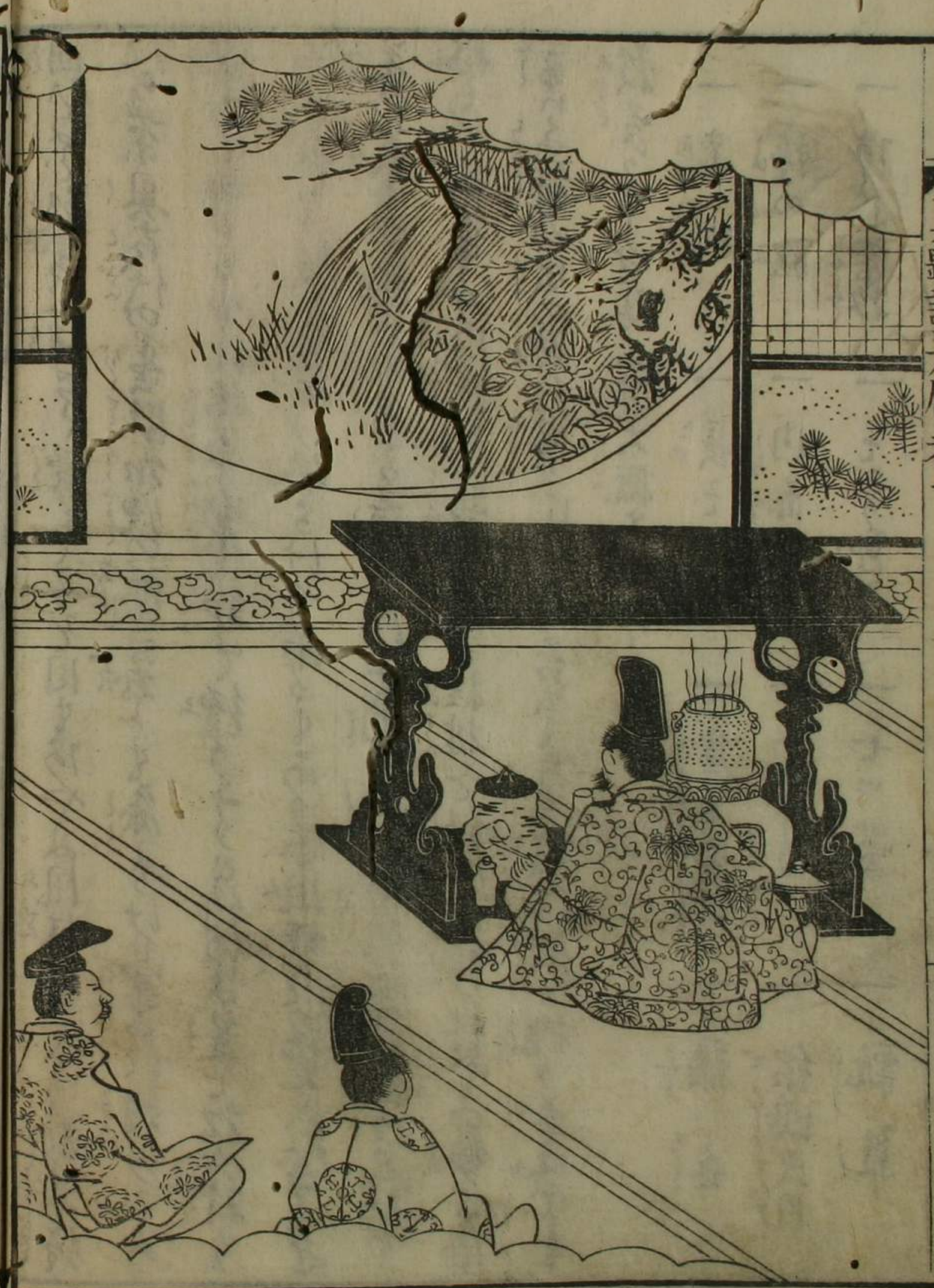
美妙のしるべ多福よりくびりその面々奉會せしめ
一貞を禮し「を芙蓉を禁じ」樂素なるりや
承の若木抄のるりり居居の者よんんんりり也

八月二日

初乃どく泥くまらまらんが茶るるに携る人毎又是の雅き御代
又ゆりあかしくよまき後を拜見「後まきんく交りなり目ち
我くが教書の石巻も歌とせん「踊り」にほびを出日と待居る
又福方く十月朔日にもあり「遠近の香妙道徳茶と嗜む福
乃者安徳々くとりる福は茶人又百又十余人小村右近の馬場乃
左右松下梅彦岩の洞まひくの圃をまのりし或は芽蔀柴の
藩繩の樞のり或は葦垣しるその中又管籥篠ぶれ葉蔀の

圃いりて私書に任せく言く「さぞ目も何や又風情めきさう叔家種
たか茶具古代の茶路和漢の味きまとも麻さけ其臺りに務けしめ
務じし物どる中に味名名い却て種りさうと竹の子まを松が枝り
くり其下に出さ退けさうけ「春もあう小風炉に湯をたぎを
夏の夏りて箱の所さう着まをゆり歩ゆ者もあうとひく
好むくの茶の風流茶物の薫りの桂林をゆりと疑れ空の懸る
言い多種乃虫の神に唱ぐ「承の若木も三ヶ所に圃と作り香数も
教書りりせ給ふ其大概九のおと」

- 一 喜 楓
- 一 長 そろり
- 一 虚 巻 法
- 一 稿 五
- 一 袴 の 強
- 一 内 赤 巻
- 一 以 下
- 一 紹 鴨 天 月
- 一 何 も 茶 扱
- 一 そろり 入
- 一 七 ッ 臺
- 一 瓢 算



- 珠德茶扱しゅとく 一 紹臨茄しやうりん 一 白玉はくぎよく 一 尼崎臺あまがさき
- 象牙茶扱きやうが 一 勿な 一 かの蓋かしの 一 芋いも
- 紹臨水しやうりん 一 柄えい 一 小あこあ 一 緋ひ
- 五徳蓋ごとく 一 胡こ 一 せんせん 一 朝山あした
- 飯い 一 十石じゆしやく 一 志し 一 新田あたら
- めんめん 一 ごとごと 一 龜蓋かめ 一 やや
- おたおた 一 細こ 一 月つき 一 令水れい

河道具の名目お持ちのりしる利休塚の宗及方やの宗久百
舌宗安と始りし系大坂塚苗有の町人秋吉と名物の道々
をお出らししは務附の芳村の花龍田の和系を定ま集め
かる心持は承る吉も自茶瓜点と諸士と揚合の三席をい道
衛信捕御自野輝資御小田信雄御日信色御二席は秀長御

同秀次御摩惠多年家御蒲生氏御千宗易三席は小田有樂毎
次九秀勝峰谷お澄澄澄澄回秀家細河忠伸をたりお説教お考を
を御澄おししと道仕人計運給い先峰谷お澄が團のりお
いお澄何くれと御食應もり候と御茶をまじりて夫よりお澄と
しはいおしそこと家と見おり候お澄お澄お澄お澄お澄お澄
殿中の真を流な依は日お澄地方一里の内空地方く建つお澄お澄
考考のさまお澄お澄お澄お澄お澄お澄お澄お澄お澄お澄お澄
かぎらうははまのり又十の法御樹の枝よ一乃瓢草と
其お澄お澄お澄お澄お澄お澄お澄お澄お澄お澄お澄お澄
彼法師謹でうのりお澄お澄お澄お澄お澄お澄お澄お澄お澄



飄^う算^べと
樹^い下^り又^も
白^く湯^すを
奠^たる
國^{くに}

莫^{もく}蹟^{じやく}記^き五^ご竹^{ちく}編^{へん}卷^巻十^十

被樹とよしけりなどと先母也其中より真椒をとり出湯とて
て掛けろふ其香を其液を懸じ是又一符の茶味と云ふ
馬丸亞相の團入せらるる名物の肩衝を沖造じを隣に構ふる條
ぶれ乃教を授け以て後河孫が團のよし道おの若やと云ふ殿
下打笑へせ給ひの 嬉しく門松立に餅はくびくる家内と云ひ
妻のたうと詠る後紫門かへんとて寢ぬし腰をよせ給ひ其外
美きとけり給きとけり悉く秘伝の沖河をけり給ふ人皆悦ぶ
るの身は日乃受ふく西日彼げに殿下真を抄じて聚樂殿
儀御し給ふ

殿下初状

けり是松被後とる能く多堪能の雲とるく香を云しけり是松
能を学い給ふ日年十二月禁裏とて沖能あつけ時香を云能能
ぬり常の美流に候とて兼てけり給ふ多きに禁裏にこの
時ついで其由目よぬとるいりてとてけり給ふ左右の大臣云御
殿上人曲侍令婦長橋の局香を云の舞給ふ能を見んやとて沖
階進くこころ給ふ香を云取樂すり馬とけり馬丸通りとて香
ある新在家の下女に又人計赤き糸壺とけり殿下の沖通給ひ
物に香の香云馬とより被女に候に宣ふは今我内香も給ひて能
ある間海香を云見物せよと候とて下女香汗と候し香と入
迎ふる香備中候に給ひて香を云明智討を舞給ふ香を
以毛利照元御摩惠多香家御を御香新に候し出せる能と
是松を云舞の香と付給ひ給ひ給ひ其由は高野香香

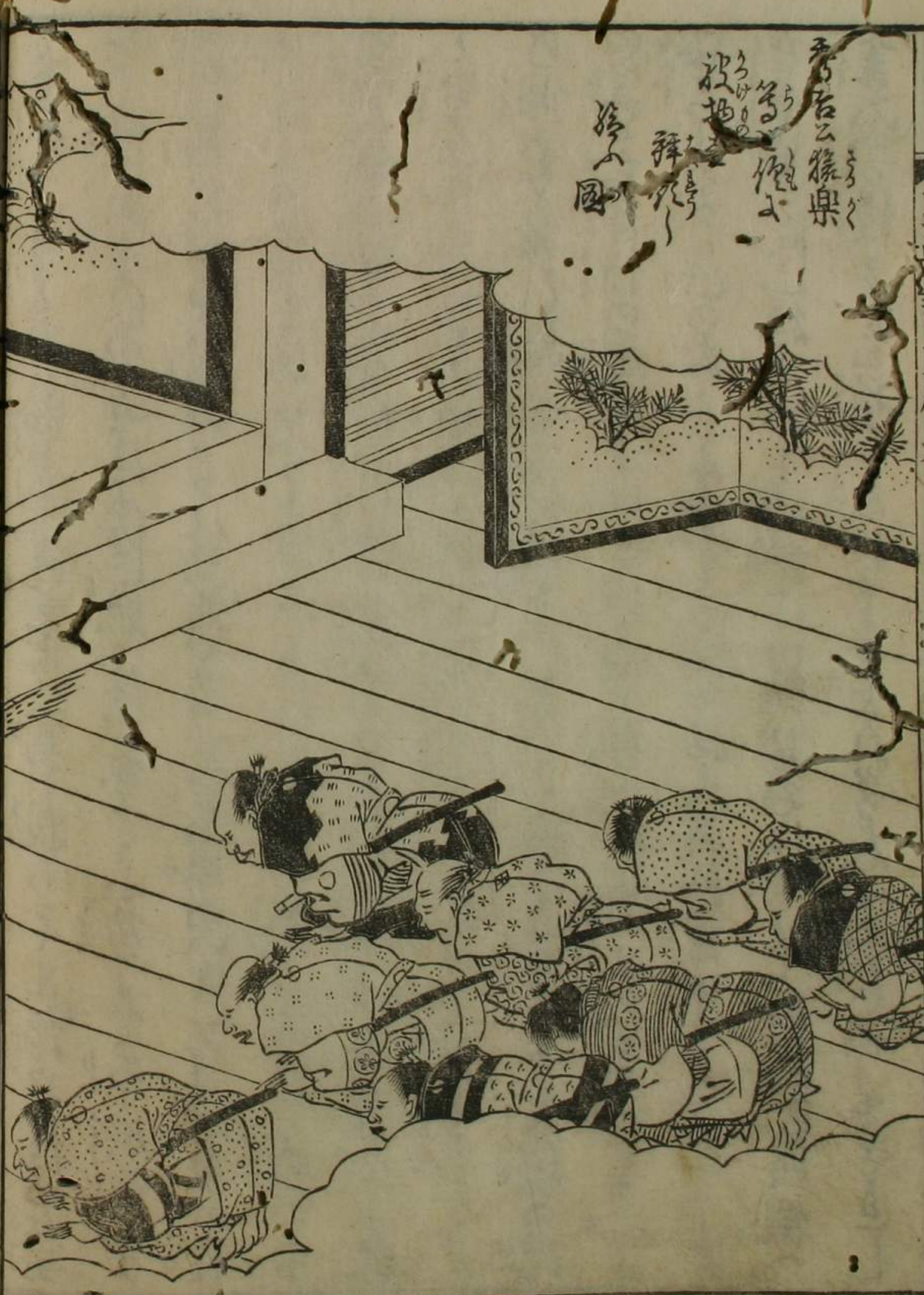


新に
左の
家の
下女
殿下
乃
通
も
図

真蹟言五篇卷一

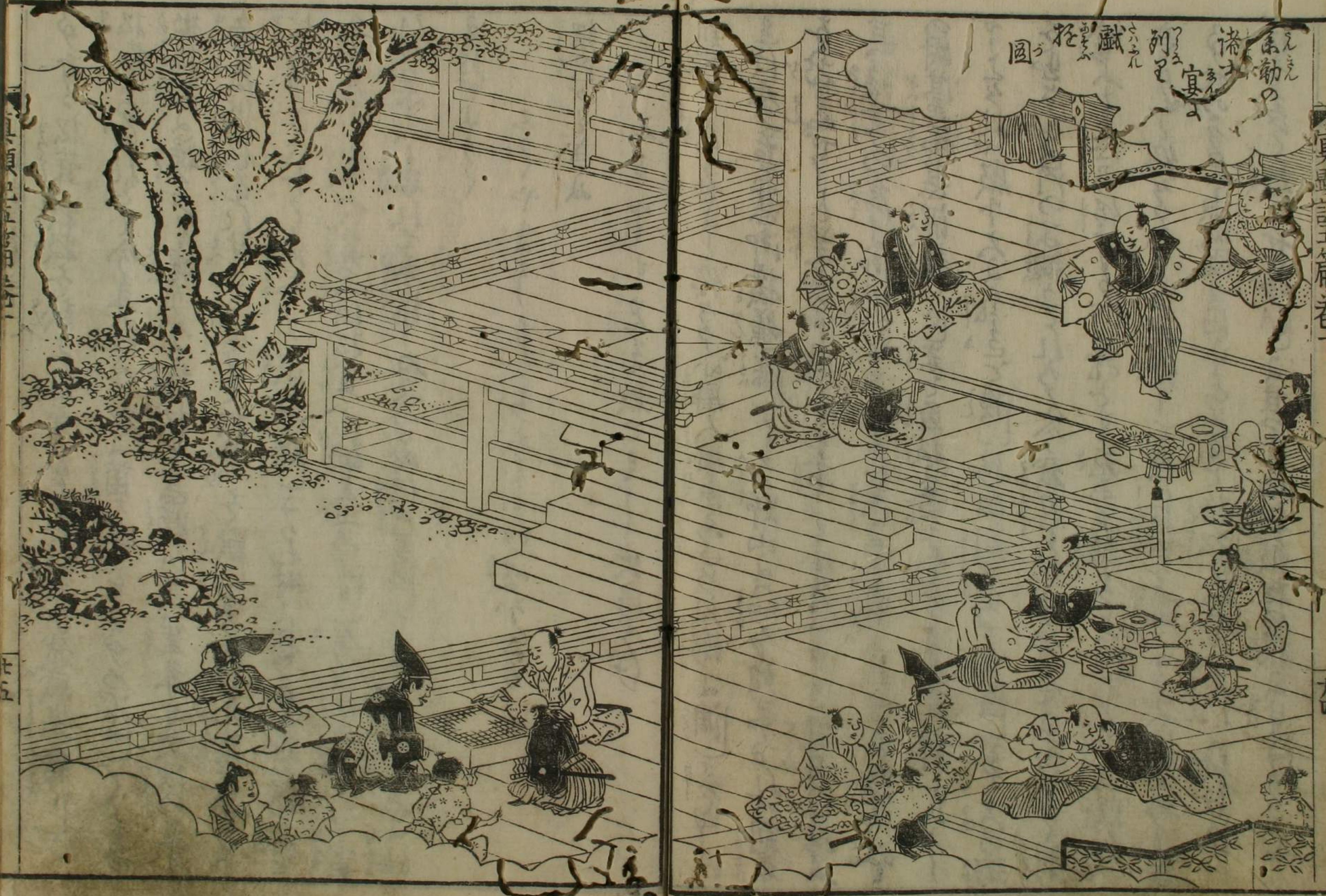
こと教多新傳あり初を能く首屈一曲ゆりたるは事と事下後
 卷の多きくはゆ敷中是と受てまじひ給ふ次は長松紙後糸其臺
 によろ耶耶と糸け耐秀を長柄の大刀と帯「虎の皮の大巾着と
 腰よぎげ孔雀の羽」を織らるる服を着「橋がりの」の共中よまき
 只松が紙と見物」給ふ能く終りてま橋をりへ退けども殿下
 きて勅き給り長松たみ迷惑」装束とりけらるる秀若との御若と
 膝の退きくらご押しくり「次牙」さて帝より猿樂の面々被物
 賜りくらにも秀若に能くま難方の方若と日中に出給ひ謹で拜
 肩よりけて入給ひ上り下登りし限は秀若を身とらりく
 持給ふがくたじ希田徳若院是と諫めてヤクつは若い内府天下
 の政ヲ掌りて武家の棟梁にまします同余りくらごしき御所持
 たるは御所持とねの御馬中の若に駕と担らるる左衛門守護の兵士
 をも御殿まのあらせ給ふは脱は信長より小勢にて本能寺
 宿し先秀があふ小松せらに給ひより先花車のははしつてはか
 ぐしき御若のまひあさるるびとやこれに秀若を笑りせ給ひ内府天下
 の間も我も勝つるは「何者」孫友とるとんや汝等心を御あへん
 と宣ひまき若の若の御せ得少し發表方と何れも建よまき
 の調を教ひ給ふ耐祐等御若に物を書きよと碓鞠の碓
 の字と若の若の道智も同く若の若の指をひて席より大の字をまき
 汝もまきつらけの若く書べ」といひ給ふ其外軍中よまき
 有書つと下し御入に書換り給ひ是と書とせぬけ其側へ
 書入つる候は書持てまはよとまはるる若の自あつとさし

真蹟 詞五篇 卷十



香名云猿
被地
後
國

真蹟記五篇卷十



諸君の
宴
列
戯
狂
國

貞觀記五篇卷十

九四

貞觀記五篇卷十

九四

狂國
戯
列
宴
諸君の

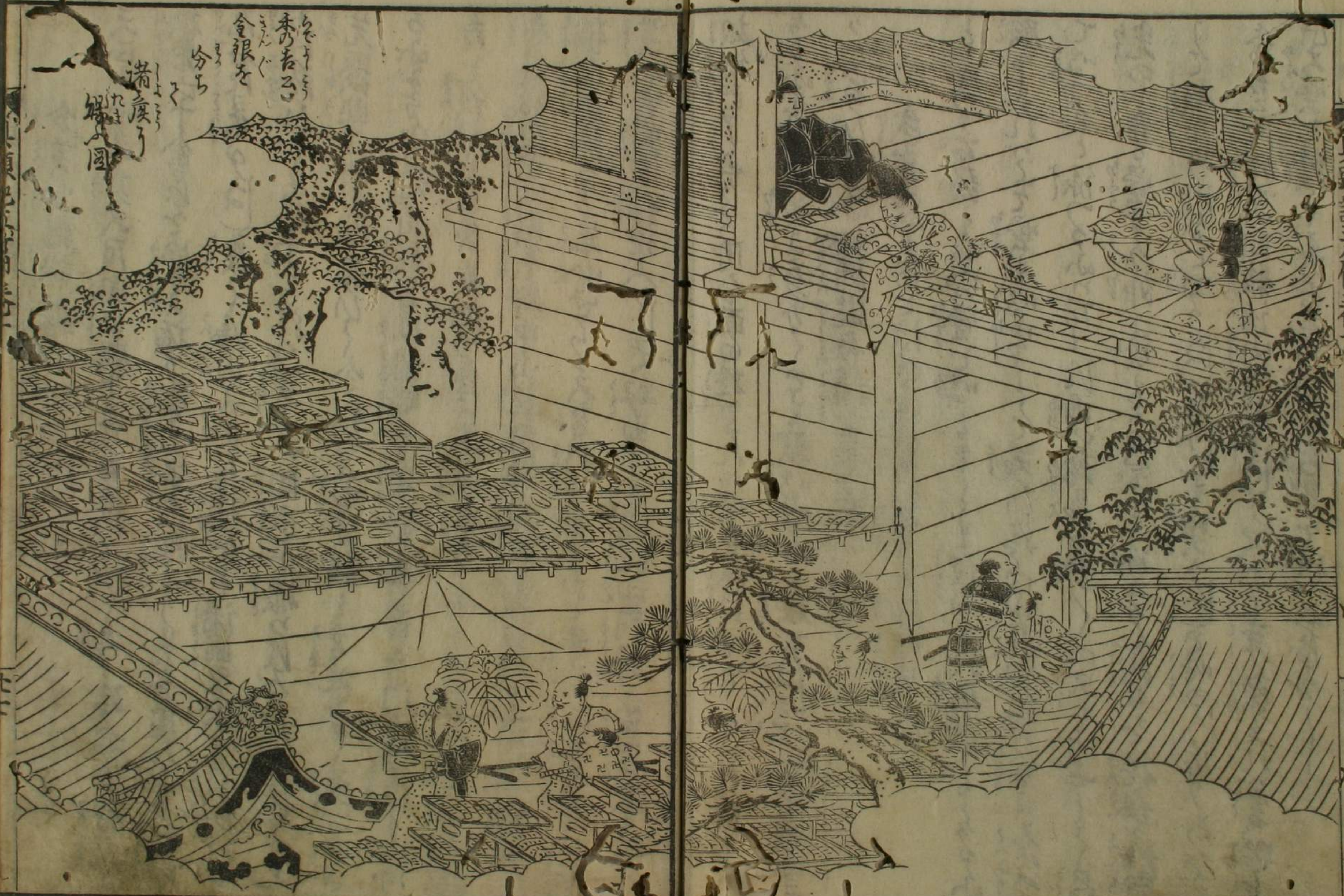
夕乃松茸我牧を献て凡そ言ふ大に歎ひ我威光普くし
 松樹ははたして今年極る松は菌をせざるゆいでとく
 彼梅松は福多く賜りたる梅松は其恨ひ其望多し又次の多
 毎度彼松虫に生るゆへそ松茸を献したる是れ元来其
 生るるをいかに他より求めて献したるは亦ある右の翁と
 けり凡そ言ふははた松茸は献し止りばし余り生るるは
 ひつるふ人びして平伏しぬ又ある時紹巴を以て我教るとせんは
 王にせよとく
 をくやまうりゆらふもまけ鳴かたる

紹巴はまきぬ

あやもやしもんえぬともし火のうけ

叔紹巴やどろり御の面を控りてんはくも雲の鳴きとせり
 たる小雲若く雲はあかしくとも我唱せんは歎せば鳴びてあき
 うと雲ひたる小細河遊致傍はありて
 武翁神や志のたはよて海ぬに雲より外鳴きはし

とよめる古歌も人の雲と鳴とくも我のこに飛ぶとやたるふ
 殿中へんがこそ雲と鳴雲とくそ美ひ給ふは古歌乃心の雲はな
 て鳴つると詠つるふにたしは雨の降疾はなぐの雲と鳴中とく
 光のともる雲より外は雲もなきそと詠するは猶もを松致が
 月を殿中乃御のとせりはしなりしも雲よりしと附の人信りあり
 香を云津河世の同雜活小説甚良しとくも事無き凡そ言ふ
 け大願と續く香を云乃幼状を度々を准て志をなす



満度
解
園
分ち
金眼を
未の若云

寶鏡言五包箱卷

九

分美金賜諸候

天心中七... 賜美金... 諸國... 先取... 戶野輝... 橋兼勝... 負...

兩諸人... 負...

- 美金二万兩 白銀一万兩宛
- 六三官位右九内大臣信雄御場
- 美金三万兩 白銀二万兩
- 右大臣大納言秀長御場
- 美金三万兩 白銀一万兩
- 右中納言秀次御場
- 日
- 後田宰相秀家御場
- 美金一子兩 白銀一万兩宛
- 毛利監元上校彦勝御場
- 白銀一万兩
- 摩意多多家御場

其餘... 三... 母...

今余面とて受へし激甚今例少き或るるに海内を以て
^{（？）} 終らざるに宜しと云ひはる

繪卷名目記五篇下巻終

